

ベゴニアの香り

加藤文子

年が明けてしばらくした頃、冬のあいだ室内に取り込んでいた原種のベゴニアの周辺が香るような気がしたり、しなかったり……。通路を横切ると、かすかに香りの帯がたなびいている。

そんな中、いつものようにベゴニアに水をやろうと鉢に触れた瞬間、香りの主はやはりこれだと
思った。

香りをたよりに中をのぞいたら、平たくてまっ白な小さな蕾の粒が葉のかげで寄り添っていた。

それはまるで地下に眠る原石がかすかに光を放ちながら潜んでいる、そんな光景を思い起こさせるものだった。はっと心を明るくしてくれる世界だった。

それにしても蕾の時からこんなに香るのも珍しい。

二十年以上育ててきて、ベゴニアの香りを味わったのは、はじめてだった。

長いこと気づかなかっただけなのか、どうだったのか……。



今年の冬は、なるべく陽に当てようと、日光浴をまめにしたのが幸いしたのか、いつもの年より蕾の数も多く、そのうえ葉も艶やかで潑刺としている。

ひと月もするうちに葉の間から赤味を帯びた細いストローのような茎が、先端に花をかかげて伸び上がってきた。深いみどりの葉の上方で純白の花々が浮遊する。

外は雪、軒は氷柱、そんな一番寒い時季に満開になって、春に招待されたような気分になる。

開花に向けて香りは強くなるものとはかり思っていたが、徐々にうすれていった。

ペゴニアの花が終わりに近づき、室内から香りが消える頃、本当の春が来る。



ペゴニア ニグラマルガ
もう少しで 春が…

Photo : Kato Fumiko